

58期リレーエッセイ

最初の事件で迷い、痛感と実感の1年

会員
中谷 ゆかり



弁護士登録して約1年

私が1年半の司法修習を終えて東京弁護士会に弁護士登録して、早くも約1年が経過しようとしている。初めて「先生」と呼ばれて、誰のことを呼んでいるのだろうと思ったことはついこの前の出来事のようにあり、時の経つ早さに驚くばかりである。司法修習生のころの自分と現在の自分の間にどれだけ違いがあるのか自分自身疑問に思いながらも、目の前にある事件に必死に取り組んでいる毎日である。

依頼者の利益だけでなく

約1年という短い期間ではあるが、これまでの事件の中で一番印象に残っている事件は、私が弁護士になって最初に扱った、母親の実家に預けられた子どもの引渡しを父親が求めた事件である。

子どもは親のもとで暮らすのが望ましいことは明らかであるから、私は依頼者である父親の要求が認められることはそう難しくないと考えていたが、子どもが父親に強い拒否反応を示していたため、子どもが父親のもとに戻ることは簡単ではなかったのである。

私は、父親が依頼者であるにもかかわらず、母親の実家で楽しそうに生活している子どもに実際会って、父親のもとに戻ることが子どもにとって幸せなのだろうかと疑問を感じた。私は、依頼者の利益を守り依頼者から信頼される弁護士が目指すべき弁護士像であると考えていたため、解決の方向性に迷いが生じたのである。

私は、この事件を通じて、依頼者の利益のために活動することは当然必要であるが、弁護士という客観的な立場から、単に依頼者の利益を追求するだけではなく、他の周囲の諸事情を常に考慮して、関係当事者にとっての妥当な解決を追求していかなければならず、それが将来的には依頼者の利益に結びつくことを学んだのである。本件では、依頼者である父親のためだけで

はなく、子どもの養育環境を第一に考え、子どものために最も望ましい解決を図ることが最も重要であることに気づいたのである。

弁護士の仕事の厳しさ

また、弁護士登録してまず痛感したことは、私のような新人であっても、その言動に一人の法律の専門家としての責任が常に伴うことであった。登録して間もない頃、私が特に意識せずに依頼者に発言した言葉を、かなり時が経過してから依頼者に指摘されたことがあった。私はその時、自分の言動の重みを痛感したのである。

このような重い責任があるからこそ、仕事のやりがいもあり、依頼者の希望通りに事件を解決した時の喜びも大きい。今の自分ではその責任を担うために必要な実力がまだまだ足りないことを実感している。

人と人との仕事

さらに、弁護士は法律の専門家である以上、近年の法改正や新しい法律に関する知識の習得に努めなければいけないことはもちろんであるが、人に接する仕事である以上、妥当な解決のためには依頼者や相手方の心情を読み取って進めていくことが必要であることを、実際に事件を扱う中で実感した。

そのためには、弁護士としての経験を積むと同時に、人間としても自分自身を向上させていかなければならないと思っている。

一歩ずつ前進できるように

正直な気持ちとして、自分がどんな弁護士になるのか、まだまだ不安な気持ちが大きい。しかし、日々の仕事に忙殺される中でも、一歩ずつ前進できるように、今の気持ちを忘れずに日々努力していきたい。